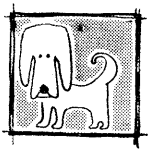
幼稚園のある一日

二月



内田和子

一、はじめに

一年保育の五歳児も、入園以来十一カ月もたつと、私自身も驚くほど幼児たちは、心身共にたくましく成長し、たいへんたのもしく感じるようになってくる。

ひとつのあそびも、友だちといっしょに考えて、相談してルールも作られ、次々に活動をしていき、教師が入る余地がない時もあり、幼児自身のすばらしい創造性、自主性に戸惑ったり、喜びを感じたり、教えられたり、幼児教育のむずかしさをつくづくと感じさせられる。

そこで、二月の幼児の姿を一月の姿からみて、私なりにつぎのように考えてみた。

① グループの一員として、活動をする。

② 自分の思っていることを友だちにはっきりいい、友だちの意見もすなおに聞き入れる。

③ 自分のもっている力を十分に発揮する。

④ 友だちになじみにくい幼児もみんなの力であたたかくつつみ、仲間に入れてやる態度ができる。

⑤ 困ったことは友だちと話し合って解決する態度ができる。

つぎに、具体的にある一日について述べてみたいと思う。

二、実践例

(1) **月日**　二月九日（月）

(2) **前日の活動**

① 楽隊あそび

Y子を中心にして、はじめ、三名で〝おうまのおやこ〟の曲で四拍子の一拍目を太鼓、二、三、四拍目をカスタでうち、あそんでいたが、単純なことと、友だちがだんだん増してきたことなどで、現在練習している〝みんなでたのしく〟の曲に合わせ、それぞれのパートをきめて活動する。

② 白雪姫ごっこ（げきあそびの導入として）

二日前に、教師といっしょに絵本をみたことから、このあそびが現われ、昨日は、姫や小人になって、レコードをかけておどったり、〝かごめ〟をしてあそんだりしていたので、教師も仲間入りをして、積木で小人の家を作り、小人や姫が、ことばを使ってあそびがつづけられるようにしむけた。

③ トランプ

一月の中旬から、はじまっているあそびであるが、〝戦争ごっこ〟（各自一枚ずつ、「一、二、三」でカードを見せ、数字の多い方がカードをもらい、最後にカードの多い方が勝ちになる）を興味をもって、六人ぐらいのグループでしていた。

④ お話作り

八つ切りの画用紙を四半分に切り、そこにお話の絵をかき、それをつづけて紙芝居を作っていたもの。また、本を作り、自分たちの知っている童話や創り話をかいていたものもあった。

(3) **本日の指導のねらい**

① 全体の活動を通して

・グループの中で、自分の意見をはっきりといい、また、友だちの意見もすなおに聞き入れる中で、ひとりひとりの創意やくふうが生かされるようにする。

・グループの中で、役割をきめて、交代し合ってあそぶ中で、どの幼児も正しくリズムがつかめるようにさせる。

・言語活動が活発になるように、また、ふんい気がでるように、小道具なども考えて作らせる。

・寒さに負けずに元気よく、戸外であそぶ。

(4) **実践**

八・三〇

★登園での出会いとウォーミングアップ

・「先生おはよう」と、元気な顔が保育室に入ってくる。出席カードに印をおしにいくもの、洋服を着替えにいくものなどいろいろで、この頃になると、教師の顔を見て、にこっと笑うだけで、さっさと友だちのところへいってしまう幼児が多い。ほとんどの幼児は、今日はこれをしてあそぼうと目的をもって登園してきており、四月の入園当初と比較して考えてみると、幼児たちは先生がいてくれればそれだけで安定して、あそびに入ることができるようである。これらの幼児を目の前に見て、現在はこれでいいのだと思う。しかし、私のところへ身体的な接触を求めにこない幼児たちに対して、同時に、私を残して大きく羽ばたいていくような感傷的な気持になることもかくすことはできない。

・F男は、登園するとすぐ、土曜日から作ってあった白雪姫の家（中積木）の上に、ひとりでひじをついてすわりこんでいる。どうしたのかな、何を考えているのかな、と、思いながらだまって眺めていると、N男らが登園してきた。早速F男は、「おい、Nちゃんここや、はよこい、昨日のつづきしようぞ」と、よんでいる。N男は、「おお、まっとってくれよ」と、返事をし、またふたりで積木の家の上ですわりこんで友だちをまっているようである。今日もN男たちは、友だちと元気よくあそぶことができるだろうと安心をする。

・元気者のW男が登園してくる。いつも、「おはよう」と声をかけてくれるのに、今朝は私の前に立っているので、教師「Wちゃんおはよう」と、声をかけるとW男は、だまって教師の顔をみてから、洋服を着替えにいく。洋服を着替え部屋に入り、きょろきょろと周囲を見わたしていたが、ひとりで積木のところへ行き、積木を立てかけて、自分も立っている。いつものW男とちがうなと思い、きょうはどうしたのかなと考えながら見守っていると、やがて積木で自動車道路を作りだし、半分ぐらいでき上がったところで、ブイとあそびを打ち切り、ひとりでブロックのかごを持ちだし、何やら組立てはじめたが、それも気に入らずすぐやめてしまった。朝気げんよく家をでたのかしら、途中でだれかとけんかしたのかしらと思いながら、W男に近づき「Wちゃん、きょうはH君とあそばないの、あそこで白雪姫ごっこしているわよ。先生といっしょに入れてもらいましょうよ」と、誘いかける。

ちょうど白雪姫ごっこのグループが役割のことでうまく相談がまとまらないらしいので、W男といっしょに仲間入りをする。W男は、すぐに小人の役にしてもらい、みんなのあとについてあそびはじめた。はじめは、めずらしさもあり、喜んであそんでいたが楽隊あそびのグループが、リズムに合わず困っているようなので、楽隊グループの方へいくと、まもなくW男もこのグループに

加わってあそんでいる。教師がいるところについてきて、そこで何とかあそんでいるがどうも元気がない。いつも積極的に物事にとりくんでいくW男がどうしたのだろうと考えながら、いろいろとたずねてみても、きょうに限って何も返事をしてくれない。たまには、こういう日があっても仕方がないと思う反面、W男の気持のつかめなかった私自身を反省するのである。

・T子が登園してくる。まもなくH子も登園してくる。T子「Hちゃん　あそぼう」H子「手がつめたいで、ストーブにあたろうに」T子「うん」と、いって、ふたりは、椅子をもってきてストーブの横にすわる。H子「Tちゃん本読もうに」といって、ふたりは、それぞれに自分の選んだ本をもってきて、だまって読んでいる。読みおわると、どちらともなく立上り、ジャンピングでとびあがりっこをしてあそんでいる。運動量も多く、はげしい動作なので、疲れてきたらしい。T子「Hちゃん、きのうのつづきしよう」といって、ふたりは、机をストーブの横にもってきて、本作りをはじめる。ずっと見守っていた教師は、T子たちが落ちついてあそびだしたので、ひきつづき見守ることにする。

しかし、全体の幼児の発達についていけない幼児も二名ほどおり、特に、教師と話をしたがったりするので、できるだけその幼児の要求をみつけてやり、いっしょにあそぶことにより、満足感を味わわせ、その幼児たちがのびのびと豊かなあそびが経験できるように心がけることがたいせつであると感ずる。

八・五〇

クラス全体が、ごたごたしたウォーミングアップのような時を経て、落ちついてあそびだしたようである。

★楽隊あそび

・Y子たち六名は、楽器をもって、楽隊あそびである。（一週間前から、全員でやっている〝みんなでたのしく〟の曲）Y子は大太鼓、B子、O子は、タンバリン、S子は、カスタとシンバルの二役、M男は、タンバリンと鈴、N子は、トライアングル、Y子は、メロディをうたいながら、それぞれのパートを指示している。そして、大太鼓も受持っている。

教師「みんなYちゃんの方をよくみて、合わせなさい」と、いう。Y子は、得意顔である。ふたつの楽器を受持っているM男やS子は、大忙しである。でも、とても楽しそうである。A子とL男が仲間入りしてくる。Y子は、「M男ちゃん、どちらかかしてあげたら」と、いう。「うん」と、M男は、鈴をA子にかしてあげる。教師「そしたら、Sちゃんもひとつ先生に楽器かしてちょうだいね」と、いうと、S子は、シンバルをかしてくれる。

つづけて演奏をしていると、「わたしも入れて」「先生もしてるの」といって、他の幼児も仲間入りしてくるので、だんだん仲間もふえ、Y子は大へん忙しそうである。Y子「だれか、たいこかわってほしいわ」教師「本当よ、Yちゃんひとりでえらいものね」と、あいづちをうつと、O男「よし、ぼくがしたろう」と、いう。Y子「うん」と、いって交代し、自分はメロディをうたいながら指揮をしている。Y子「Sちゃん打ち方ちがうに、こうして、タンタンタン　トンと、やすむのやに。見ておってみな」Y子にいわれたS子は、いっしょうけんめいにおぼえようと努めている。

友だちもふえY子の声では、よくみんなに聞えないし、Y子も疲れるだろうと考え、教師が、ピアノの伴奏をしたらもっと楽しくなると考えて、ピアノを弾きだした。みんなは、はじめ、変な顔をしていたが、S男「先生が、ピアノ弾いてくれるとじょうずにできるなあ」と、いう。

教師がピアノを弾きだしたので、他のあそびをしていた幼児も仲間に入ってきたので、Y子は、全体の幼児を見られなくなり、Y子「ちょとみんな、この台の上にのってしようにに、たいこだけ下でさ」と、発言したので、舞台の上にみんなのる。A子ら四名は、椅子をもってあがり、すわっている。それをみて、K男「椅子は前にならべて、うしろは立つのさ、いいやろう」と、みんなにいう。そのものになりきってする楽団のような感じになった。

このように、ごっこ的なものから、一歩すすんで現実のものに近づけようとする幼児の姿をみて、ここまでに発達してきた幼児の要求にこたえて、教師が前面にでて指導するときもあってよいのではないかと思った。M男「Oちゃんたいこ代ってくれよ」O男「よし」と、いって今度は、タンバリンをもっている。教師も楽しくなり、つづけてピアノを弾きだした。S男のカスタが、みんなとそろわないので、S男にわからせるために、ピアノをはっきりとひいた。S男もまちがいを気づき、なおした。

タンバリンは動きが大きくなるので、少々舞台の上ではせまいようである。O男「タンバリン、おりようにに、ここでしよう」と、舞台の横におりた。みんなもつられておりてしまった。「本当にいいことを思いついたわね。そこならいくら元気よくたたいても平気よ」と、いいながらつづけてピアノを弾いた。タンバリンの幼児は、大きく動作できるので、身体を動かしながら打ったり、とんだりしている。

「おい、たいこ代って」「よし」と、一曲おわるたびに、大太鼓の役は、交代している。やはり太鼓は、一番の人気がある。クラス全体でやっていた時、気の小さいI男などは、順番がくると

いやがって、太鼓をたたこうともしなかったのに、きょうは元気よくたたいて大張り切りである。まちがえると、みんなで教え合っている。幼児たちも教師にいわれると恥ずかしそうにてれたりするのに、友だちにいわれるとうれしそうに笑いながらなおしている。I男をほめてやるとうれしそうに笑っていた。

★白雪姫ごっこ（げきの導入として）

友だち待ちしていたF男たち七名のメンバーが揃ったらしく、何か相談をしている。どうやら、まほう使いの役になり手がないらしい。I男「なんで、小人は小さいものやもの、ぼくは、小人しかあかんやろう」W男「そうやな」R子「わたしは、うさぎやもんな」M子「わたしは、白雪姫やしな」K男「そしたら、だれもおらんやないか」と話し合っているのに気づいたので、楽器グループに「白雪姫のところに先生はいくから、みんなでつづけていてね」と、声をかけてから、白雪姫のグループに加わり、少しようすをみてから、教師「そうしたら、まほうつかいのおばあさんなしにしたらどう」K男「白雪姫が死なんでおもしろないわ。王子が、だきおこすのやものな」と、いう。

I男「そしたら、Nちゃんにたのもうに。色は黒いし、いいやんか」という。みんなは、さんせいして、材料棚の中の掃除をひとりでしているN子のところへ走っていく。N子は、しっかりものだが気のいい子である。あまり友だちに誘われることの少ないN子は、何かを期待するような顔で喜んで仲間入りをする。みんなは、N子の気げんをとるように話をしかけ、とうとうおばあさん役に仕立てた。

白雪姫一名。おばあさん一名。うさぎ一名。王子一名。小人四名の役ができた。

小人「さあ仕事にいってくるよ」

白雪姫「いっていらっしゃい」

小人「おばあさんに気をつけるのだよ」

白雪姫「はい」

小人と白雪姫は、手をふりながら別れて行く。小人たちは、窓の方まで行って、仕事のまねをしている。

白雪姫「これから　おそうじでもしましょう」と、いいながら、積木の枠の中に入ってしまう。小人役のK男は、廊下のところまで走っていって、本物のほうきをもってきて白雪姫に渡してやる。K男の考えをうれしく思うと同時に、思いこんだだけではあそびがつづけていけなくなってきた幼児の指導について考えさせられた。すると、I男が「そんならぼくらも仕事するもの作らなあかんやないか」という。みんなは、うなずく。

I男「こっちへこい」と、小人の幼児らをBブロックのところにつれていき、長くつないで、つるはしのようなものを作ったり、棒のようなものを作りだした。C男「何しとんの、ぼくも入れて」と、いってくる。I男「小人やないか」C男「小人て、なんや」B男「白雪姫ごっこやないか」C男「ぼくかて、その話よく知っているもの入れてな。手伝ってやるでさ」と、C男は、うまく仲間入りをした。やっとでき上がり、また、はじめからやりなおしである。

小人「いってきます」

白雪姫「いっていらっしゃい」……

M子の白雪姫は、「はよう、おばあさんこんか」と、N子をよぶ。N子は、うれしそうに「こんにちわ」と、でてくる。そして何かを渡すまねをする。姫は、ばったりと倒れる。小人は、まってましたとばかりとんできて、わんわんと泣くまねをする。そしてそこにU男の王子が馬に乗るまねをしてやってきて、姫をだきおこす。目を開けて、めでたし、めでたしである。

これまで幼児たちの活動の発展がどうなるかと思って見守っていたが、うさぎの役のR子が他の役の幼児の中にうまく入ることができず、せっかくみんなと相談してこの役をきめたのに、R子もかわいそうだし、他の役の幼児たちがそれに気づいてほしいと思い、みんなに声をかけた。

R子「でもね、でれやへんだもん」と、少々不服そうに訴える。教師「そうね。Rちゃんは、どんなふうにしたかったの」とR子の気持をたずねると、R子は、「姫を助けたかったの」と返事をしてくれる。教師「そうね、そうしたら、小人さんたちがお仕事にでかけたら、そのあとで、姫のお手伝いをしたり、守ってあげたり、あそんであげたりしたらいいじゃないの」と、相談をもちかけると、R子は、「うん」といって、何か考えているようである。他の幼児も教師の意見を聞き、F男「ぼくらのでかけたあと、Rちゃんしな」と、いう。

そこで、教師は、もう一度R子も含めてみんなであそばせたいと思ったので、「ねえ、みんなでもう一度うさちゃんも入れて、やってみたら」と、ことばをかけた。みんなは、「うん」と返事をしてくれる。教師は、今度は、R子も楽しく活動できるだろうと期待をもった。ぼつぼつこの活動に気がついた他の幼児たちが見にやってきた。そして、「もっとしゃべろ」とか、「かっこいい」などと、声援してくれるので、R子も「白雪姫さん、小人のいないうち守ってあげましょう」と、いいながら張り切っている。小人たちも元気よく活動をつづけている。やっと、R子もみんなの前で自分を表現できたので、うれしく思ったと同時に、すなお

に受け入れてくれた他の幼児たちも立派だとうれしく感じた。

★絵本作り

・一方、T子、H子のふたりは、机をストーブの横にもってきて、絵本を作りはじめた。T子は、お料理の本で、卵焼きの作り方などを文字で、『砂糖二はい、卵二個をまぜフライパンでやきます』などと書いている。H子は、動物やらお姫さまやらの絵をかいている。どうやら自分で話を作っているらしい。使っている紙が、包装紙の裏を利用しているので、せっかくの作品がよくみえないとかわいそうだと思い、画用紙の方が丈夫だし、はっきりとみえていいから替えたらと、声をかけると、ふたりは、喜んで画用紙をとりにいき、T子「Hちゃん、もっと作ろうね」と話しながら作り続けている。これでいいと思って、ふたりにまかせて活動をさせた。

★トランプあそび

・T男とE男は、トランプで〝戦争ごっこ〟をしている。カードを二つに分け、一、二、三で、それぞれが、自分の手持ちのカードを一枚だけ出す。数の多い方が勝ちで少ない方のカードをもらってしまうというルールで、カードのなくなるまでやるのである。このグループも自分たちの力できちんとやっていけると思ったので、そのままあそびを続けさせた。

・他に、お家ごっこや粘土であそんでいる幼児もいるが、ここでは紙面の都合上省略をする。

一〇・一〇

★陣とり鬼

室内あそびに疲れを感じだしたのか、白雪姫のグループが、外へでてかげふみ鬼をはじめた。他の幼児たちのあそびにも区切りがみえだした。そこで、外へでて、かげふみ鬼の仲間入りをする。半数以上の幼児が外へでてあそびだしたので、室内に残っている幼児にもこのような暖い日に思う存分走らせてやりたいと思ったので、「きょうは暖いし、みんなで陣とりしない。お部屋のお友だちも、さそってきてちょうだい」と、いっしょにあそんでいた他の幼児にたのむと、「わあい」と、歓声をあげて呼びにいった。陣とり鬼は、最近幼児たちに喜ばれているあそびのひとつでもある。

全員が集まったところで、もう一度「今から、みんなで陣とりをしてあそびましょう」と、話しかける。元気のよい幼児は、とびあがって喜んでいる。二組に分けるのに、男女に分けると多少

能力差がでるので困ったなとは思いながら、やはり、男女に分けた方がよく味方も判るので、男女にわけることにする。ルールは男女それぞれ三〇メートルぐらい離れて陣を作り、「用意　ドン」で、はじめ、相手方をタッチして、あてられたらその場でジャンケンをする。負けたら相手の陣へ行く。そして、味方のものがタッチしてくれたら助かり、自分の陣へかえれるのである。教師の合図ではじまる。男の子は、元気よく突進してくる。女の子は、はじめしりごみしていたが、だんだん元気がでてきて、能力のたりないところは、口でいいまかしている。

A男「Nちゃん　ドン」と、つく。N子はびっくりして、ジャンケンをする。A男が、負けたので、N子は自分の陣へつれていく。A男「おい、タッチしてくれ」と、助けを求め、味方の方に手をだす。女の子六名が前で守っているので、男の子は、なかなか攻められない。A男「おまえら、そんなにかこうな」という。S子は「それは、わたしらの勝手やないの。おこることないわなあ」と、他の女の子に同意を得る。この時期になると幼児たちも集団間の関係がよく理解できるようになってくるので、攻めるものと守るものとの役がよく理解されている。A男は、女の子のいうとおりと思ったのか、今度は、考えて地面にねそべって手をのばし、味方の助けを待っている。女の子が陣からでないので攻めあぐねていた男の子らは、やっとすきをみつけて、A男にタッチして、自分たちの陣へ戻っていく。

他の女の子は、ほとんど男の子に捕まり、陣を守っているものだけが残っている。男の子は攻めてくるし、なかなか陣から出られないので、女の子らは困っている。F男「そんなに長いこと入っておったらおもしろないわ、でてこな」という。H男も、「そうやんか、十かぞえるひまにでな、まけやぞ」という。そこで、あそびが楽しくつづけられるようにと思って、男の子に「ねえ、女の子がでやすいように、陣から少し離れてあげたらどう」と話しかけると、G男「そうやな、おまえら、少しさがってやれよ」と、命令する。女の子が不利になってきているので、D子「先生女ぐみに入ってよ」という。

教師もはじめ考えていたとおりの予想になったので、女の子に気の毒に思ったが、幼児たちは勝負にこだわらず楽しそうにしているので、安心しながら女の子の組に入れてもらってあそんだ。男の子のグループから「女ぐみ、こっすいな」とか、「いいやないか、女はよわいもの」などという声も聞えたが、あまり取りあげる必要も感じなかったので、つづけてあそんだ。幼児たちも室内から室外へでて、また、素朴なあそびに触れ、どの幼児も思い切り体を動かし走りまわったので、満足そうである。

いろいろと理くつをいう幼児もいるが、やはり集団でひとつのあそびを楽しもうとする気持は、十分めばえてきたようである。

十・五〇

★先生といっしょに絵本をみる

幼児たちは、十分活動して疲れをみせはじめたので、部屋に入り、絵本を読んであげることにした。全員を部屋に入れて〝百万匹のねこ〟の絵本を読む。

十一・二〇

絵本を読み終り、戸外へ、また、便所へとでていく幼児もある。教師は、げきあそびを発展させるために、小道具を作ろうと思い、昨日より用意しておいた色画紙で帽子を作りはじめると、「先生、何作っているの。わたしも作らせて」と、五、六人の幼児が集まってきたので、その幼児らに紙を配ってあげ、「これ、白雪姫の小人さんの帽子なのよ」と、説明すると、喜んで手伝ってくれる。「これでも作っていいの」と、聞きながら教師のするのをみては三角帽子を作っている。教師「ねえ、帽子の他に何か必要なものないかしら、みんなで考えてみて」と、誘いかけているところへ、T男がとびこんできて「先生、もうすぐ弁当でしょう」と、聞きにくる。時計を見ると十一時四〇分なので、あわてて、「このつづきは明日しましょうね」といって、一応片付けをしてしまった。考えてみればこの短い時間に製作が十分できるわけではないし、また、幼児の気持を十分に考えることもできるはずはないのに、本当に、何のために、何をしたのか、すべて中途半端になり、私自身のうかつさを痛感した。

十一・四〇

弁当の準備。昼食をたべる。

十二・三〇

おにごっこ、楽隊あそび、絵画などと、それぞれに楽しくあそぶ。（くわしくは省略）

一・三〇

降園

三、まとめ

今日も一日いろいろな活動が行なわれた。しかし、ひとりひとりが自分のもっている可能性を十分発揮することができたであろうか。また、自己表現の乏しい幼児に、自信を与え、ひきのばしてやれただろうか。と考え、主な活動について、もう一度反省してみたいと思った。

①楽隊ごっこ

きょうは、この活動を通して、幼児から学ぶことの尊さをつくづく知らされると共に、なおいっそう、教師自身が自分を鍛えていかねばならないと思った。というのは、私自身これまで器楽合奏をする場合、たいてい、クラス全体の活動の中で教師が中心になってすすめた方が、より効果的だと思いこんでいたのである。ひとりひとりを大切にし、集団を育ててきたつもりの私が、器楽合奏だけは、教師中心の方がうまくいくだろうと思いすすめてきたことが恥ずかしく思われた。きょうのような方法なら、みんな揃って楽しくできるのにと、本当に幼児に教えられた。

また、楽隊あそびの途中で、舞台を使ってあそぼうとしているその姿は、幼児自身あそびを現実の方向にもっていこうとするあらわれで、その態度をしっかりと受けとめて、前向きに指導してやらねばならないと思った。

②白雪姫ごっこ

これは、げきあそびの導入として取扱っていたのであるが、幼児の活動をみていると、やはり、幼児にはできる限界があるように思われる。教師自身が幼児の活動をよく見守る中で、適当に助言を与え、ひとりひとりの創意工夫をのばしてやらねばと思う。

そのためにも教師自身が、ひとりひとりが選んだ活動の中で、ある程度前面にでて、幼児と共に進んでいかねばならぬと思った。

③生活リズムについて

この頃のように寒さの厳しい時期は、幼児たちも朝から室内の活動にとりくみ、なかなか外へでて活動しようとしない。そこで、きょうのように暖い日には、つとめて戸外にでて活動するように心がけているが、その反面、生活リズムがくずれ、きょうの十一時二〇分から十一時四〇分までのような時間ができて、幼児も教師も困る間がでてくる。

運動量のはげしい活動は、長時間つづけてすることはできないし、これが、はじめ戸外活動をしていて、室内の活動へと移る場合だと、いろいろの活動や音楽リズムへと、生活リズムはスムーズに流れていくのであるが、それがうまく流れないことに問題があるようである。しかし、その中で幼児の生活のバランスを考えてやる必要がある。

いずれにしても、やはり、幼児と教師の暖い信頼によって、ひとりひとりの幼児を十分にのばし育てていかねばならないと思う。

（四日市市立下野幼稚園）